

「経験の伝承」における生涯発達の視点からの先行研究の検討  
— generativity 研究に焦点を当てて —

竹内 一真

京都大学大学院教育学研究科紀要 第58号

2012

## 「経験の伝承」における生涯発達の視点からの先行研究の検討

—generativity 研究に焦点を当てて—

竹内 一真

### 1. 問題と目的

#### 1. 1. 問題の所在：経験を伝えるという問題

近年、教育の文脈の中で自らの培ってきた経験を後続する世代に伝えるということに関する研究の必要性が高まっている。このような後続世代への経験の伝承という文脈において特に注目されている問題としてもものづくり等を担ってきた世代の大量退職、そして、地方の芸能や工芸などの後継者不足、さらに教師の専門性育成などの問題が挙げられよう。

例えば、伝統的な芸能・工芸の分野では歴史的に伝わってきた技芸を受け継ぐ人材の不足、すなわち、後継者不足という問題がある。特に都会とは異なり地方の農村部では過疎化などに伴いこれまで伝わってきた技能や技術が途絶えてしまうという危機に瀕している。このような後継者不足等に伴う技能や芸能の断絶というのは決して日本だけの問題ではなく、広く世界的な問題として認識されており、ユネスコでは「無形文化遺産の保護に関する条約」を制定し、有形の文化財だけでなく、無形の文化財においても後続の世代に技能が途絶えることなく伝わるように保護を行っていくとする状況になっている。しかし、一方で有形の文化財と異なり、変化することが前提であるような熟練の結果ともいえる優れた技能や技術を有する当事者の経験はどのようにすれば伝わったと言えるのか、あるいは経験をどのようなものとして捉えることができるのかということが議論となっている（吉田、2005）。

また、教師の専門性育成というのも、危惧する大きな問題といえよう。近年、教師教育において最大の危機は、だれもグランドデザインを描けないということにあるということが指摘されている（佐藤、2006）。複数の原因が指摘されているが、一つに団塊世代教師の大量退職の開始により、教員採用の平均倍率は急速に転落してきていることに加え、厳しい条件下の中で早期離職者が増えているということが挙げられよう。そのため、本来指導すべき立場にある熟練した教師の退職と中堅の離職により、本来であれば伝わっていくような優れた技能を持つ教師の経験が初任教師に伝わりづらい状況にある。

このように、現在、多様な観点から優れた技能を持っている熟達者の経験を次の世代に伝えるということが大きな問題となっているのである。注目すべきは、いずれの問題においても長期にわたる熟達による経験をどのように次の世代に伝えるのかということが焦点になっているという点である。つまり、単に「どのように伝えるのか」ということだけでなく、熟達者が職業生活や生涯を通じて培ってきた経験をどのように後続世代に伝えるのかということが問題なのであり、それ故、発達の視点を含み入れたうえで、どのように伝承という問題を捉えることができるの

かということが一つの大きな問題として浮上してくるのである。

## 1. 2. 本稿の目的：熟達による経験の伝承

これまでの熟達研究では熟達者の発達プロセスを明らかにすることに焦点があてられており、熟達者が得た経験を次の世代にどのように伝えるのかというテーマは十分に触れられてこなかった。熟達者の特徴や熟達化のプロセスを明らかにする研究は Dreyfus による五段階モデル (Dreyfus, 1983) や Ericsson による 10 年ルールや「よく考えられた練習」の必要性 (Ericsson, 1996 : Ericsson et al., 1993) など多面的になされてきた。例えば、波多野らによる「手続きの熟達者」と「適応的熟達者」による熟達者の分類に関する研究 (波多野 & 稲垣, 1983) をみると、「手続きの熟達者」は初心者から熟達者から指導を受けて手続きの知識に基づいて定型的な仕事であれば素早く正確にこなすことができるが、定型外の仕事に対しては十分に対応できない段階を指し、一方で、「適応的熟達者」は手続きの知識を積み上げ、経験を重ねることで柔軟に状況に応じて知識を適用できる段階を指す。このように二つの段階の移行として変化を捉えることで熟達を捉えようとする。

また、特定の専門職を対象としたエキスパート、例えば、教師を対象とした研究であっても、基本的には熟練へと至った現在の状態を頂点としてそこまでの軌跡を明らかにすることに力点が置かれている。秋田は教師の発達を捉える視点として、やまだの生涯発達モデル (やまだ, 1995) を参照しながら「成長・熟達モデル」、「獲得・喪失両義性モデル」、「人生の危機的移行モデル」、「共同体への参加モデル」という四つのモデルを提示している (秋田, 1999)。秋田のモデルによる説明からも見て取れるように、基本的には教師の発達を捉える研究は個人の生まれてから死ぬまで、すなわち、はじめて学校に赴任してから退職までが対象となる時期なのであって、あくまで優れた技能を持つ熟練者の現在を頂点として、現在に至るまでのプロセスを明らかにすることに研究の力点が置かれているのである。

このように、これまでの熟達研究ではあくまで熟達者の現在を一つの頂点としてそこに至るまでのプロセスを明らかにすることに力点が置かれており、現在熟達者の持っている経験を次の世代にどのように伝えるのかということに関しては十分に研究が行われていないのが現状なのである (竹内, 2011)。では生涯発達の中で「経験の伝承」というテーマにどのようにアプローチすればよいのであろうか。本稿ではこの問いに対して Erikson による generativity 研究を見ていくことで答えることにする。つまり、generativity 研究を振り返ることで、これまでどのように後続世代とのかかわりというテーマが生涯発達の中で取り上げられてきており、そして、生涯を通じて培ってきた経験を伝えるという観点からどのような研究が求められているのかということを指摘していく。

## 2. generativity とライフサイクルの二重性

Erikson によって用いられた generativity という概念はライフサイクルという概念と極めて密接な関係を持って使われる。Erikson はライフサイクルという用語に関してサイクルという語は一個人の人生が持つ二重の傾向を表現するためのものであり、一方に一つのまとまった経験としてそれ自身完結しようとする傾向と、他方その個人が、強さも弱さも、そこから受け取りまたそ

れに与えるところの世代連鎖の一環を形作ろうとする傾向であると定義づけている（Erikson、1968）。このような定義からもわかるように、Erikson のライフサイクルという用語には一方において死によって完了する個人の自己完結性と、もう一方において前の世代によって生み出され、そして、今度は次の世代を生み育ててゆく世代連鎖性という二つのサイクルの重なり合ったものとして描かれるのである（西平、1993・2008）。この世代連鎖性と自己完結性という二つのサイクルを結び付けるものこそが *generativity* ということになる。Erikson は *generativity* にライフサイクルの二重性をつなぐ重要な概念と位置づけるとともに、複数の世代を結び、つなげていくという世代と世代の連鎖を担う役割を担わせているのである（西山、2010）。

さらに、Erikson にとっての *generativity* という概念は世代と世代の関係を表すだけでなく、様々なものを生み出していくという役割も担っている。Erikson は初期の自らの著作『幼児期と社会』（Erikson、1963）では、*generativity* に関しては十分に焦点が当てられていないが、その後、長年の研究の中で深めていき「ライフサイクル、その完結」の中で *generativity* に関して子孫を生み出すこと（*procreativity*）、生産性（*productivity*）、創造性（*creativity*）を包含するものであり、自分自身のさらなる同一性の開発に関わる一種の自己－生殖を含めて新しい存在や新しい製作物や新しい観念を生み出すことを表していると位置づけている（Erikson & Erikson、1982）。このように Erikson にとって *generativity* とは単純に自分の子どもを産み育てるという文字どおりの意味を超えて、さらに深い意味で、後続する世代に残す子どもや仕事や作品を生み出し、育み、後続世代へと伝えていくという働きのことを指している（やまだ、2002）。従って、熟練した工芸家が自らの技能を生かして工芸品を世に残していくということや研鑽を積んだ舞踊家が自らの優れた技能を次の世代に伝えようとするのも母親や父親が子育てをして後続世代をケアすることと同じように *generativity* の中で扱われるのである。

無論、Erikson のエピジェネティック図式を引くまでもなく、後続世代へのケアが一方的ではなく、相互的であるという点も忘れてはならない論点であろう。*generativity* を発達できず、自らの人生だけを生きるのであれば、どこまでたっても自分自身の自己完結した生にしか興味が持てないであろうし、たとえ、子どもが生まれても虐待をしたり、関心をもなかつたりで、結果として停滞を味わい、人間関係が貧困になってしまう（やまだ、2002；西平、2009）。このように後続世代へのケアへ至るプロセスというのは決して発達の過程において単純なものではなく、当事者の葛藤や苦しみなどを経験していく、非常に困難な道なのである。このような困難な道を Erikson は成人期の一つの重要な課題として位置づけるわけであるが、この成人期という時期の特有さにも目を向ける必要がある。成人期は、自己のアイデンティティが確立し、家庭においても仕事においても中心的な役割を果たしていくこととなる。同時に、様々な出来事を経験していくことで自らの経験も深まり、個人の自己完結性というライフサイクルの一側面が充足し始める。その充足した経験をもって後続する世代に関わることに課題を見出すことが成人期として位置づけられるのである（岡本、2007）。

このように Erikson の *generativity* という概念は非常に広く、そして深く意味づけられており、それゆえ、どのように *generativity* にアプローチするのかということ自体が一つの論点となりうるのである。

### 3. generativity に関するこれまでの研究：世代間の関係性を捉えるために

#### 3. 1. generativity に関する基礎的研究

generativity は本格的に研究が着手されるのは 80 年代に入ってからであり、それまでは十分に実証的な研究はされてこなかった。80 年代半ば以降から Kotre にはじまり、McAdams、Peterson や Stewart が中心となって実証的な研究が行われるようになり、理論的な土台を築いてきたといえる (McAdams & Logan, 2004 : McAdams, 2001)。

McAdams らは 80 年代から 90 年代前半の研究知見を受け、generativity を文化的要請・内的欲求・関心・信念・関与・行為・物語という心理学的に 7 つの構成要素に分けて論じている (McAdams & de St. Aubin, 1992)。まず、内的欲求 (inner desire) と文化的要請 (cultural demand) という心理学的に二つの要素は generativity の動機の根源となる要素である。内的欲求において重要なポイントは主体性 (agency) と共同性 (communion) にある。主体性とは人間に与えられた限られた時間という制約の中で自己の存在を可能な限り広げたいという点に起因する欲求であり、共同性とは自分が作り上げてきたものをケアしたり、自分の力で生きたりすることができるようになるまで育みたいという点に起因する欲求である。この主体性や共同性に起因する欲求を強く持っていることは生成的な活動に対して積極的に関わったり、生成的な活動を自ら起こしたりすることと関係があることが実証的にも示されている (Peterson & Stewart, 1993・1996 : de St. Aubin & McAdams, 1995)。

次に文化的要請という観点であるが内的欲求というのが人間にとって内なる generativity に対する欲求を指すのに対して、文的要請は外部からの generativity への要請を指し示すものといえる。本質的な意味において、generativity は社会全体の中において時間という概念と極めて密接に結びついている (McAdams et al., 1998)。人間という存在が有限である限り、社会という組織を回していくためには広い意味において子孫を育てていく必要があり、それは個人的な課題というよりも、むしろ、社会的な要請という観点から必要だからである。McAdams らは青年期、中年期、老年期を対象としてそれぞれのコホートごとに後続する世代への関与や活動の関与を問う調査を行ったところ、中年期のコホートにおいて青年期や老年期のコホートよりも後続世代への関与や活動が有意に高かったことが示された (McAdams et al., 1993)。無論、この調査だけでは対象とした中年期のコホートにおける特異性を排除できないものの、成人期における後続する世代へのケアや generativity という社会的要請を示すものとして結果は一貫していると言える。

次に実際の generativity のパフォーマンスと結びつくのが関心 (concern)、信念 (belief)、関与 (commitment)、そして行動 (action) である。パフォーマンスと結びつく群の中において最も広範な特徴を有するのが後続する世代に対する関心である。特に関心は generativity とパフォーマンスの関係を示していく中で非常に重要な位置を占めている。McAdams らは各個人の後続する世代への関心における差異を測定するために、Loyola Generativity Scale (以下、LGS) を開発した。LGS は 20 の質問項目からなっており、創造性 (creating)、世話 (offering)、世代継承性 (maintaining) という三つの因子からなる (McAdams & de St. Aubin, 1992)。LGS はその後の幸福感 (well-being) などの generativity の応用的な研究につながる非常に重要な尺度であり、日本においても翻訳され、研究がすすめられている (丸島, 2005 : 丸島・有光, 2007)。

理想的な generativity の行動へと移るプロセスにおいては後続する世代への関心は後続世代へ

の関与を生み出すために非常に重要な役割を発揮する信念と結びつく。この信念に関しては Erikson 自身も *generativity* への行為や関与は特に人間や人間の未来に対する有意義性や有意義性への忠誠や信頼という点に根ざしていると示唆している (Erikson, 1963)。Van de Water らは信念と *generativity* への関与の関係を調べ、その結果、未来に対する希望は *generativity* への関与と積極的に、かつ大きく関係しているということが明らかとなった (Van de Water & McAdams, 1989)。

また、McAdams らは後続世代への関与を測定するために Emmons (1986) の個人的目標の追及 (*personal strivings*) へのアプローチに着目する。個人的目標の追及とは個人が日常において達成しようとしているゴールや目標のことであり、オープンエンドの質問紙に 10 個の現在追及していることをリスト化するように尋ねられる。McAdams らはこのアプローチの中で、得点化の際に *generativity* の信念という観点から「後続世代への関与」「他人の人生へ積極的な成果の創出、促進。あるいはケアや援助、教授などを与えること」「社会や他者への創造的な貢献」という三つの視点に着目し、抜き出していくのである (McAdams et al., 1993)。

個人目標の追及はあくまで行動に移るまでの目標やプランを明らかにするものであり、そのため、実際どのような行動をしたのかということまで問うものではなかった。そこで、実際に何を行動したのかということ明らかにするために McAdams らは *Generative Behavior Checklist* (以下、GBC) を発展させた (McAdams & St. Aubin, 1992)。GBC では 50 個の項目が用意されており、そのうち、40 個の項目は *generativity* を示唆するような項目が用意されている。この 50 個の項目にどれだけ答えることができるのか、ということを通じて *generativity* へとつながっている行動の頻度を明らかにするというものである。

McAdams によって提案された七つの心理学的構成要素の最後が心理的な最後の物語 (*narration*) であるが、自らの人生を意味づけ、組織化する行為を物語と呼んでいる (Bruner, 1990: やまだ, 2000a)。近年では、Erikson のアイデンティティという概念自体がナラティブアプローチから迫られており、語ることを通じて自らのアイデンティティを再構成しようとするものとして位置づけ、研究されてきている (McAdams, 1993)。McAdams において *generativity* に関係する語りは自らの後続世代へと関与する努力や計画を理解し、意味づけるために欠かせない方法として位置づけられている。

McAdams によって示された *generativity* に関する基礎的知見に関してはその後、研究がより深まっており、Bradley らによる *generative status* に関する研究 (Bradley & Marcia, 1998) や、近年ではビッグファイブとの関連などに関しても調査が進んでいる (Cox et al., 2010)。

このように、80 年代から 90 年代前半をかけて行われた *generativity* に関する研究は McAdams らが主導していくことで理論的な整備がなされ、その後の発展的・応用的な研究へと移行していくための下支えとなったという。

### 3. 2. *generativity* 研究の応用的展開

McAdams らによる基礎的研究を基に、様々な応用的な研究が進められてきた。例えば、養育と *generativity* に関する研究も重要なテーマである。母親で LGS の高い女性は育児により多くの労力を費やしたり、関与を行ったりするということが示されている (Peterson & Klohnen,

1995)。また、養育における権威性と *generativity* という観点からの研究もなされており、LGS が高い女性は権威主義的な養育の態度をとるということが複数の研究から示されている (Peterson et al., 1997 : Pratt et al., 1999)。権威主義的な態度で接する親は子どもにたくさんの決まり事や注意をする一方で家庭での決定事項において子どもの声を重視しているという傾向がある。また、大規模調査の結果として LGS が高い父親と母親は子どもの学校での活動に積極的に関わったり、子どもの学習状況や学校で最近していることなどに関してより多くの知識を持ったりしているということが示されている。

養育に対する研究の他に幸福感 (*well-being*) に対する研究も *generativity* との関連では非常に重要なテーマとして挙げられよう。McAdams らの一連の調査では LGS や GBS などと人生の満足、幸せ、自尊心、人生の一貫性などと正の相関が見られた (de St Aubin & McAdams, 1995 : McAdams et al., 1998)。このほかにも *generativity* と肯定的な態度との正の相関がみられたり (Ackerman et al., 2000)、逆に、ノイローゼと負の相関がみられたりしている (de St. Aubin & McAdams, 1995)。この幸福感と *generativity* との関連で全米的な規模で調査を行った研究として Keyes & Ryff (1998) があるが、この調査においても各種の *generativity* と関連する指標と心理学的、社会学的な幸福感との間において正の相関がみられている。このように複数の調査の結果から、*generativity* と幸福感には特に成人期において強く結び付いているということができるのである。

このほかにも社会的活動への参与と *generativity* との関連に関する研究などもなされてきている。Hart らの研究によれば、後続世代に対して積極的に関わる人はより広範な友人関係、より多くのコミュニティからのソーシャルサポート、深い次元での社会的な関係に関する満足感を味わっていると指摘している (Hart et al., 2001)。さらに、*generativity* と教会への出席や宗教的活動への積極的な参加とも関連がある。このほかにも政治的な問題への興味 (Cole & Stewart, 1996) やコミュニティへの愛着や帰属感 (Peterson et al., 1997) などとも関係があることが示されているのである。

ここまでは *generativity* の各スケールを基にそれぞれのテーマとの関係を問うような問題の設定の仕方であったが、一方で、ライフストーリーインタビューをもとに *generativity* にアプローチする研究も存在する。*generativity* は中年期の成人にとって統合感や目的を持って生きる語りにおける重要なストーリーラインといえる (McAdams, 2001)。McAdams は LGS の高い成人と低い成人の語りを比べたときに高い成人は極端に悪い状態から良い成果を生み出してきたという語りをライフストーリーの中で焦点を当てやすいという傾向を見出しており、このような語りを *redemptive sequence* と呼んでいる。実際、*redemptive sequence* がより多く見られる人はあまり見られない人よりも幸福感を感じやすいということが示されている (McAdams et al., 2001)。McAdams はこのような *redemptive sequence* は特にアメリカ人に文化的にも政治的にも顕著に見られるとして、*redemptive self* と名付けている (McAdams, 2008)。

ここまで見てきたように、*generativity* に関する応用的な研究は McAdams らによる基礎研究を基に、養育や幸福感を初めとして多様なテーマを対象に行われているのである。

### 3. 3. これまでの generativity 研究の限界と問題点

さて、ここまで generativity 研究を振り返ってきたわけであるが、経験の伝承という観点からは generativity 研究があくまで個人の発達、すなわち、自己完結のライフサイクルに焦点が当たっているという点が批判されよう。McAdams らの基礎的研究は心理学的に7つの構成要素に分けて generativity をより詳細に捉えようとするものであったが、あくまで行為に至るまでの心理的なモデルを作成することが目的であった。この行為に至るまでの心理的なモデルを明らかにし、各種のステータスを捉える手法を示すことで、数値化して表すことができ、それが結果として養育や幸福感などのテーマと関連を調べることを可能にしているのである。そのため、テーマが養育や幸福感、社会的活動など多岐にわたっていたとしても結局捉える事が出来るのは個人のパーソナリティと各テーマ間の関連でしかない。また、ライフストーリー研究に関してもあくまで焦点は自らが生まれてから現在に至るまでの語りを明らかにすることに焦点が置かれている。つまり、これまでの研究では現在の状態を測定し、後続世代への関与を図る人の特徴を養育や幸福感、社会的な参与などとの関連性を調べていくか、そこに至るまでのプロセスを明らかにするかということが研究の中心となっているのであり、それ故、ライフサイクルにおける自己完結性に焦点が当たっていると言えるのである。

問題に立ち返って考えると、現在の伝統芸能あるいは工芸の技能の伝承であったり、教師の専門的経験の伝承であったりするような課題においてみられるのは、熟練によって培われた技能や経験を後続世代にどのように受け継いでほしいと意味づけており、そしてそれはどのように伝えているのかという問題なのであった。熟練においては先行する世代、すなわち、伝統芸能や工芸であれば、伝承者にとっての師匠になるであろうし、教師であれば自らの教師としての資質を育ててくれた先輩から受けた教を自らのものにしつつも、日々の実践を通じてさらに高めようとしてきている。受け継ぎ、そしてより高められた経験を当事者はどのようにして後続する世代に伝えているのか、あるいはどのようにして受け継いでほしいのかということこそが現在の経験の伝承という問題において切実に求められている視点なのである。

この現在課題とされている経験の伝承という問題を一步引いて見れば、専門家の「個人」としての熟達化を追うというよりは、個人を世代と世代の間に埋め込まれた存在として捉え、世代を超えて伝わってきた経験を次の世代にどのように伝え残すのかという世代を超えた経験の変化と伝達にどのようにアプローチするのかという問題といえる。無論、伝統芸能のように意識的に先行する世代から引き継いだ経験を次の世代に伝えるというケースもあれば、先行する世代ということをそれほど意識することなく、本や教育を通じて先行する世代から経験を受け取り、自らが育んで伝えているという場合もあるだろう。しかし、ここで重要なのは先行する世代から伝えられた経験を意識的に残そうとしているのか、あるいは無意識的なのかという点ではなく、「経験の伝承」という問題それ自体が世代と世代の関係を意味づけることなくしてはありえないということなのである。例えば、「今の新たな問題に対処する方法はこれまでどんな本を読んでも、どんな人に聞いてもなかったから自分で新たに作り上げた。その方法を後輩には伝えたい」という語りがあったときも先行する世代を意味づけながら、自らの経験を位置づけ、そして後続する世代との関係性を語っていると捉える事ができよう。

このように経験の伝承というテーマにおいては「個人」の熟達化が問題ではなく、「経験」

に焦点を当てた複数世代間の変化と受け渡しの問題なのであり、個人を世代と世代に埋め込まれた存在として背景化させ、世代を超えて伝わる「経験」という側面を前面に押し出して捉えることができるような理論的なフレームが必要となるのである。このようなフレームこそが Erikson の主張するライフサイクルの二重性における自己完結性ではないもう一つの側面である「世代連鎖性」を中心としたフレームということになる。世代連鎖性を中心に捉えることができるようなフレームがない限り、自ら得た経験を次の世代にどのように受け継いでほしいのかといった個としての熟達を超えて自らの死んだあとに自らの経験をどのように受け継いでほしいのかというテーマは極めて限定的にしか扱えないのである。

#### 4. 新たな generativity 研究から視座：生成的ライフサイクルモデルを対象として

##### 4. 1. 視座としての生成的ライフサイクルモデル

近年では生涯発達心理学において、これまでの発達の考え方自体が先行する世代や後続する世代と独立した「個」として捉えられているという批判が起こってきている。これまでの発達研究では世代から独立した個の成長に焦点を当て、誕生から死までという時間軸で捉えていたため、個が死んだ後のことや個と次の世代の関係などは、扱われないか、扱われたとしても宗教などの関連で捉えられていた（小嶋、1995）。また、世代性という観点から独立したものとして扱い、歴史的文脈から取り出して「個人」を捉えるということ自体が、ギリシャに起源をもつ近代の特徴的な捉え方であると指摘されている（Yamada, 2002）。心理学における発達概念自体、Erikson や Levinson、Baltes らの貢献により、対象とする時間軸が生まれてから死ぬまでを扱うことができるように拡張されてきたが、裏を返せば誕生から死という時間的な枠組みの中にとどまっているということができよう。

このような批判を受け、やまだは Erikson の generativity に東洋の循環思想に組み込んだ、人生を連続する世代の中の一部と捉えるライフサイクルモデルである生成的ライフサイクルモデル（Yamada, 2002; Yamada, 2004; Yamada & Kato, 2006）を提示した。やまだは既存の発達心理学の描く発達図や東洋に伝わる絵などを分析しつつ、世代から独立して個人の発達を捉えようとするモデルは、より高次に、そして、直線的に伸びていくという「直線－進化モデル（linearly - progressive model）」に基づいており、このようなモデルは極めて西洋的なものであると指摘する。一方で、東洋の絵画には人の生涯を直線的に描くのではなく、むしろ、円環的に描くということを示し、その上で、直線的－進化モデルに代わる新たな世代と世代を結ぶような円環的な発達モデルの必要性を主張している。このような主張の中でやまだの研究ではイメージ画法と呼ばれる手法（やまだ、1988）を用いて、フランスや日本など各国の大学生を対象に自らの「人生のイメージ地図」を紙に描かせ、同時に絵についての説明も同じ紙に書くように求めた。このイメージ画を分析する中で、自らの人生を先行世代と後続世代に埋め込まれた存在として描く絵が文化に関わらず存在することを見出し、そこから生成的ライフサイクルモデルを作り上げていく（Yamada, 2002）。やまだは自らが提唱する生成的ライフサイクルモデルに関してイメージ画による分析を背景に五つの特徴に言及している（Yamada & Kato, 2006）。一つ目が循環的なモデルということであり、時間に対する視点は循環的・螺旋的で繰り返されるという点である。二つ目が、変化の重要性であり、直線－進化モデルでははじめと終わりが重要なものに対して、生成的

ライフサイクルモデルではプロセスとしての変化を重視する。三つ目が死や減退の意味変化であり、死や減退とは決して否定的なものではなく、むしろ、プロセスの中の必然的な移行として捉えられる。四つ目が文脈主義で、個人のライフサイクルは他のライフサイクルと多重的に関わり合う。そして、最後の五つ目が人生の意味づけの重視という観点でどの段階もそれ自身特徴的で意味があるため、個人の人生の中で特別に優位な段階も存在しない。

このようなイメージ画という当事者の意味づけから捉えられた生成的ライフサイクルモデルはこれまでの発達心理学が「誕生から死」という時間の幅を扱っていたのと異なり、誕生前や死後の出来事を扱うことも可能とする。このような時間概念の変更は、単に生涯という時間がより長くなったという量的な変化だけを意味するのではない。もし、時間の幅を広げただけで、発達の到着地点に「あの世」を措定するのであれば、時間軸における終点を「死」から「あの世」にずらしたに過ぎず、依然として世代から独立した「個」という呪縛から逃れられていないものとなろう。やまだの研究の眼目は死後や誕生前といった時間軸に Erikson の generativity 概念を導入することで単純に「あの世」の議論に落とし込むのではなく、世代の議論に置き換えるところにある。この generativity という概念を世代と世代を結ぶものとして生成的ライフサイクルモデルの中核に据えることで、誕生前や死後を世代と世代の関係性の議論にシフトさせると同時に、generativity に関する自己完結性に関する研究の位置づけを自らがこれまで発達してきた中で築き上げたものを後続世代に伝える関心という世代連鎖性の議論へと転換させる方向性を指し示していると言えよう。

ここで注意が必要なのは生成的ライフサイクルモデルでは世代と世代の関係性をあくまで当事者の意味づけから捉えるという点にある。やまだの研究がイメージ画と呼ばれる当事者の意味づけを捉える手法を使っていることからこの点は理解されよう。従って、当事者がどのように世代と世代をつないでいるのか、あるいは、どのような歴史的な文脈の中に位置づけられているのかというのは当事者の意味づけから明らかにされる必要がある。このように個を世代と世代の関係の中に埋め込まれた存在として措定することで、誕生から死までを扱う「個人のライフサイクル」から、世代と世代の関係性に埋め込まれた「ライフサイクルの中の個人」(やまだ、2000b)、すなわち Erikson の言う世代連鎖性へと視点をずらし、世代を超えた経験の伝承へとアプローチする視点を提供するのである。

#### 4. 2. 経験の伝承と生成的ライフサイクルモデル

生成的ライフサイクルモデルによってライフサイクルの世代連鎖性を捉えるモデルは示されているが、実証的に当事者の経験の伝承をどのように捉えたらよいのかということはまだ十分になされていない。これまで、生成的ライフサイクルモデルの枠組みで実証的に研究されているのはごくわずかで、特に優れた技能を持つような当事者の経験の伝承を捉える研究はほとんどないのが実情なのである。そもそも、経験の伝承といったときに、どのような方法で当事者の経験を捉えたらよいのかということ自体が一つの非常に大きな問題として設定されよう。今後は生成的ライフサイクルモデルというモデルに基づきながらも、当事者の経験を捉えるための実証的知見を積み重ねていく必要があると考えられるのである。

## 参考文献

- 秋田喜代美 (1999) 「教師が発達する道筋」 藤岡完治・澤本和子編『授業で成長する教師』pp.27-39, 東京: ぎょうせい
- Ackerman, S., Zuroff, DC., & Moskowitz, DS.(2000) Generativity in Midlife and Young Adults: Links to Agency, Communion and Subjective well-being. *International Journal of Aging and Human Development*, 50(1), pp.17-41
- Bradley, CL., & Marcia, JE. (1998) Generativity-stagnation: A Five Category Model. *Journal of Personality*, 66(1), pp.39-64
- Bruner, J. (1990) *Acts of Meaning*. Cambridge: Harvard University Press
- Cox, KS., Wilt, J., Olson, B., & McAdams, DP. (2010) Generativity, the Big Five, and Psychosocial Adaptation in Midlife Adults. *Journal of Personality*, 78, pp.1185-1208
- Cole, ER., & Stewart, AJ. (1996) Meanings of Political Participation among Black and White Women: Political Identity and Social Responsibility. *Journal of Personality and Social Psychology*, 71, pp.130-140
- de St. Aubin, E., & McAdams, DP. (1995) The Relations of Generative Concern and Generative Action to Personality Traits, Satisfaction/Happiness with Life and Ego Development. *Journal of Adult Development*, 2, pp.99-112
- Dreyfus, SE. (1983) How Expert Managers Tend to Let the Gut Lead the Brain. *Management Review*, 72(9), pp.56-61
- Ericsson, KA. (1996) *The Road to Excellence: The Acquisition of Expert Performance in the Arts and Sciences, Sports and Games*. Mahwah: Erlbaum
- Ericsson, KA., Krampe, RT., & Tesch-Römer, C. (1993) The Role of Deliberate Practice in the Acquisition of Expert Performance. *Psychological Review*, 100, pp.363-406.
- Erikson, EH. (1963) *Childhood and Society*. New York: Basic Books (仁科弥生訳(1977-1980)『幼児期と社会Ⅰ・Ⅱ』東京:みすず書房)
- Erikson, EH. (1968) Life Cycle. Sills DL. (Ed.) *International Encyclopedia of the Social Science*, pp.286-292, New York: Crowell Collier and Macmillan, INC.
- Erikson, EH., & Erikson, JM. (1982) *The Life Cycle Completed*. New York: W.W.Norton (村瀬孝雄・近藤邦夫訳 (2001)『ライフサイクル、その完結』東京:みすず書房)
- Emmons, RA. (1986) Personal Strivings: An Approach to Personality and Subjective Well-being. *Journal of Personality and Social Psychology*, 51, pp.1058-1068
- Hart, HM., McAdams, DP., Hirsch, BJ., & Bauer, JJ. (2001) Generativity and Social Involvement among African Americans and White Adults. *Journal of Research in Personality*, 35(2), pp.208-230
- 波多野宜余夫・稲垣佳世子 (1983) 「文化と認知: 知識の伝達と構成をめぐる」 坂元昂 (編)『思考・知能・言語 現代基礎心理学 7』pp.191-210, 東京: 東京大学出版会
- Keyes, CL., & Ryff, CD. (1998) Generativity in Adult Lives: Social Structural Contours and

- Quality of Life Consequences. In McAdams, D., & de St. Aubin, E (Eds.) *Generativity and Adult Development*, pp. 227-263, Washington, DC: American Psychological Association
- 小嶋秀夫 (1995) 「生涯発達心理学の成立と現状」 無藤隆・やまだようこ (編) 『生涯発達心理学とは何かー理論と方法ー』 pp.11-35, 東京：金子書房
- McAdams, DP. (1993) *The Stories We Live By*. New York: Guilford Press
- McAdams, DP. (2001) Generativity in Midlife. In Lachman, M. (Ed.) *Handbook of Midlife Development*, pp. 279-309, New York: Wiley
- McAdams, DP. (2008) *The Redemptive Self*. New York: Oxford University Press
- McAdams, DP., & de St. Aubin, Ed. (1992) A Theory of Generativity and Its Assessment through Self-report Behavioral Acts and Narrative Themes in Autobiography. *Journal of Personality and Social Psychology*, 62(6), pp.1003-1015
- McAdams, DP., & Logan, RL. (2004) What is Generativity? In de St Aubin, E., & McAdams, DP., & Kim, T. (Eds.) *The Generative Society*, pp.15-31, Washington DC: American Psychological Association
- McAdams, DP., Hart, HM., & Maruna, S. (1998) The Anatomy of Generativity. In McAdams, DP., & de St. Aubin, E. (Eds.) *Generativity and Adult Development: How and Why We Care for the Next Generation*, pp. 7-43, Washington, DC: APA Press
- McAdams, DP., de St. Aubin, E., & Logan, RL. (1993) Generativity among Young Midlife and Older Adults. *Psychology and Aging*, 8(2), pp.221-230
- McAdams, DP., Reynolds, J., Lewis, M., Patten, A., & Bowman, PT. (2001) When Bad Things Turn Good and Good Things Turn Bad: Sequences of Redemption and Contamination in Life Narrative, and Their Relation to Psychosocial Adaptation in Midlife Adults and in Students. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 27, pp.472-483
- 丸島令子 (2005) 「世代性尺度の作成：世代性の関心と行動モデルの測定」 『心理臨床学研究』 23(4), pp.422-433
- 丸島令子・有光興記 (2007) 「世代性関心と世代性行動尺度の改訂版作成と信頼性、妥当性の検討」 『心理学研究』 78(3), pp.303-309
- 西平直 (1993) 『エリクソンの人間学』 東京：東京大学出版会
- 西平直 (2008) 「ライフサイクルの二重性」 武川正吾・西平直 (編) 『死生学3 ライフサイクルと死』 pp.133-151, 東京：東京大学出版会
- 西山直子 (2010) 「世代間関係における Generativity の可能性：Narrative Approach の立場から」 『京都大学大学院教育学研究科紀要』 56, pp.345-357
- 岡本祐子 (2007) 『アイデンティティ生涯発達論の展開』 京都：ミネルヴァ書房
- Peterson, BE., & Klohnen, EC. (1995) Realization of Generativity in Two Samples of Women at Midlife. *Psychology and Aging*, 10, pp.20-29
- Peterson, BE., & Stewart, AJ. (1993) Generativity and Social Motives in Young Adults. *Journal of Personality and Social Psychology*, 65(1), pp.186-198
- Peterson, BE., & Stewart, AJ. (1996) Antecedents and Contexts of Generativity Motivation at

- Midlife. *Psychology & Aging*, 11, pp.20-33.
- Peterson, BE., Smirles, KA., & Wentworth, PA. (1997) Generativity and Authoritarianism: Implications for Personality, Political Involvement, and Parenting. *Journal of Personality and Social Psychology*, 72, pp.1202-1216.
- Pratt, MW., Norris, JE., Arnold, ML., & Filyer, R. (1999) Generativity and Moral Development as Predictors of Value-socialization Narratives for Young Persons across the Adult Life Span: From Lessons Learned to Stories Shared. *Psychology and Aging*, 14(3), pp.414-426
- 佐藤学 (2006) 「教師教育の危機と改革の原理的検討」『日本教師教育学会年報』 15, pp.8-17
- 竹内一真 (2011) 専門家の技能に関する先行研究と現在の動向：ポスト正統的周辺参加論における「教え手」の位相, 『京都大学大学院教育学研究科紀要』 57, pp.407-419
- Van de Water, DA. & McAdams, DP. (1989) Generativity and Erikson's "Belief in the Species". *Journal of Research in Personality*, 23, pp. 435-449
- やまだようこ (1988) 『私をつつむ母なるもの—イメージ画にみる日本文化の心理』 東京：有斐閣
- やまだようこ (1995) 「生涯発達を捉えるモデル」 無藤隆・やまだようこ (編) 『生涯発達心理学とは何か』 pp.57-92, 東京：金子書房
- やまだようこ (2000a) 「人生を物語ることの意味—ライフストーリーの心理学」やまだようこ (編) 『人生を物語る—生成のライフストーリー』 pp.1-38, 京都：ミネルヴァ書房
- やまだようこ (2000b) 「日本文化の生命循環と生涯発達観」 小嶋秀夫他 (編) 『人間発達と心理学』 pp.106-115, 東京：金子書房
- やまだようこ (2002) 「成人後期：世代を育み伝える」 小嶋秀夫・やまだようこ (編) 『生涯発達心理学』 pp.156-170, 東京：放送大学教育振興会
- Yamada, Yoko. (2002) Models of Life-span Developmental Psychology: A Construction of the Generative Life Cycle Model Including the Concept of "Death". *京都大学教育学研究科紀要*, 48, pp.39-62
- Yamada, Yoko. (2004) The Generative Life Cycle Model: Integration of Japanese Folk Images and Generativity. de St. Aubin, E, McAdams, DP., & Kim, T. (Eds) *The Generative Society: Caring for Future Generations*, pp.97-112, Washington: American Psychological Association
- Yamada, Yoko. & Kato, Yoshinobu (2006) Images of Circular Time and Spiral Repetition: The Generative Life Cycle Model. *Culture & Psychology*, 12(2), pp.143-160
- 吉田憲司 (2005) 「有形・無形文化遺産とミュージアム—ユネスコにおける無形文化遺産保護条約採択を機に一」『民博通信』 108, pp.2-3

(教育方法学講座 博士後期課程 2 回生)

(受稿 2011 年 9 月 2 日、改稿 2011 年 11 月 25 日、受理 2011 年 12 月 26 日)

## Investigation of Previous Studies from the Viewpoint of Life-span Developmental Perspective to Teaching Experience: Focusing on Generativity

TAKEUCHI Kazuma

This study was preformed to clarify what types of studies are needed to teach experience. Previous studies were investigated from the viewpoint of life-span development related to teaching experience. It is an important issue how experience of expert teaches. For example, successors are getting decrease in traditional arts or crafts because of low birthrate or urbanization. Especially this study focuses on the generativity, which Erikson has proposed at “*Childhood and Society*”. Previous studies focused on two points. Firstly, the frame of study for generativity focused on the individual life cycle. Secondly, the research issues have focused on well-being and parenthood. So, there have been few studies about relationship between generations in education. However, a new frame of study has emerged. Yamada proposed the Generative Life Cycle Model which takes life as situated among generations. This model is effective for taking to teach experience, but there are few studies using this model. So in the future we need to use this model to the issue of teaching experience.